
「死の欲動」と「死の本能」の峻別

ラカンからドゥルーズへ

Kuwahara Tabito

桑原 旅人

はじめに

『精神分析のとまどい』のなかでジャック・デリダが一貫して強調しているように⁽¹⁾、精神において多様な形態と方向性で表現される「残酷さ(Grausamkeit, cruauté)」の領域をより深く思考するためにフロイトが提起した概念が、「死の欲動(Todestrieb)」である。この概念はどうして快原理に反して、ひとは苦しみを求めるのかという問題を提起している。ひとは生きている限り、無限にエロスのなものとしての快を要求し続けようとするのが正常であるように思えるが、過去の苦しみをくり返し想起する「反復強迫(Wiederholungszwang, compulsion de répétition)」のような現象は、個人において必ずしも特殊なものではない。死の欲動を語る論者たちが必ずといってよいほど指摘し、留保するように、フロイトは「快原理の彼岸」(一九二〇年)においてこの矛盾の意味を解決するための一つの「思弁(Spekulation)」として死の欲動という概念を生み出した。そしてフロイトのこの思弁を積極的に受け入れ、かつそれをたんなる死や無機物への回帰といった問題系に還元しなかったのがジャック・ラカンとジル・ドゥルーズであった⁽²⁾。

これまで二人の思想の接続が積極的なかたちで言及されることは少なかったように思われる。むしろ、『アンチ・オイディプス』の影響から(必ずしもラカンが直接的に非難されているというわけでもないが)、ドゥルーズ=ガタリによってラカンのファルス中心主義を批判する、というような議論がこれまで目立ってきたように思える。しかしながら、一時期にはラカンの『エクリ』に魅了され、彼に面会もしていたドゥルーズは⁽³⁾、六〇年代後半の著作において受容的なしかたでその名に言及している。そしてラカンもまたドゥルーズを称賛していた⁽⁴⁾。したがって、少なくとも『アンチ・オイディプス』以前において、フロイト=ラカンの精神分析とドゥルーズの関係性は、敵対的なものではなかったと言えるだろう。

本稿は、二人の理論が共鳴するのが「死の欲動(pulsion de mort)」、そして「死の本能(instinct de mort)」に関する論点であると考ええる。ラカンがこの二つの概念の区別を明示的にしたことはないものの、死の欲動とは別の含意を死の本能に与えているように思える箇所が、とくに彼の講義録には散見される。一方でドゥルーズは、『ザッヘル・マゾッホ紹介』

(1) Jacques Derrid, *États d'âme de la psychanalyse: l'impossible au-delà d'une souveraine cruauté*, Paris, Gailée, 2000. [ジャック・デリダ『精神分析のとまどい——至高の残酷さの彼方の不可能なもの』西宮かおり訳、岩波書店、二〇一六年]。なお、本稿における引用の訳出は、既訳を参照しつつ、原文から適宜変更、もしくは著者が訳出した部分がある。

(2) メラニー・クラインは、フロイトの「死の欲動」

を洗練した偉大な分析家であるが、本稿が主題とする超越的なものとして「死の本能」という意味を含めてこの概念を扱うことはない。

(3) François Dosse, *Gille Deleuze et Félix Guattari: biographie croisée*, Paris, Découverte, 2007, pp. 224-225. [フランソワ・ドス『ドゥルーズとガタリ——交差的評伝』杉村昌昭訳、河出書房新社、二〇〇九年、二〇一—二〇二頁]

(4) Jacques Lacan, *Le Séminaire livre XVI: D'un Autre*

のなかでこの二つの概念を峻別している。

彼らにおいて死の本能とは、経験的な領域の残滓を残す死の欲動にはけっして還元されえないものであった、と我々は考える。本稿ではまず、二人が死の欲動と死の本能をどのように語っていたかを示した上で、両者の理論の近接性を指摘しつつも、ドゥルーズがこの死の本能という概念を、明確な定義までは示すことができなかったラカン以上に洗練させていたことを明らかにする。

1. 歴史性を包含する「死の欲動」

ラカンは、『精神分析の倫理』において「死の欲動」を論じている。彼は、「欲動(plusion)」という概念をエネルギー論的に捉える理解を批判し、そこには、「歴史性(historisité)」が重要な要素として存在していると主張する⁽⁵⁾。つまりそれは欲動がその場限りの一時的なエネルギーの放出としてだけでは把握できず、記憶や回想といったかたちで、「通時態(diachronie)」としての歴史から分離しえないということの意味している。そしてそのことによって、欲動は過去の事実を基盤とした解釈への可能性に開かれることになる。『エクリ』所収の「フロイトの「欲動」(Trieb)と精神分析家の欲望について」において、「フロイトの欲動(pulsion)は、本能(instinct)とは何の関係もない」⁽⁶⁾と指摘することで、欲動と本能の区別が強調されていることから理解できるように、欲動を生物学的に解釈される一般的な意味での本能の水準に位置させることによってそれを性的なものとして、すなわち直接的な身体性の領野に属するものと解釈することは不可能である⁽⁷⁾。というのも、それは現在の出来事と過去の出来事がなんらかのかたちで接続したときにこそ顕在化し、分析することが可能な多分に象徴的なものであるからだ。

またラカンは死の欲動を解釈するための補助線としてサドの理論を利用している。彼によればサドは、「人間が罪によって自然の新たな創造へと協力する、という理論」(SVII249: 68下)を築き上げた人物である。ひとは罪を犯すことによって、禁じられていた領域を侵犯し、新たな領域を開拓していく。サドにおいて罪は、我々の可能性を拡大するための必要条件で

à l'autre 1968-1969, Paris, Seuil, 2006, p.134.

(5) Jacques Lacan, *Le Séminaire livre VI: L'éthique de la psychanalyse 1959-1960*, Paris, Seuil, 1986, p. 248. [『精神分析の倫理(上、下)』小出浩之・鈴木國文・保科正章、菅原誠一訳、岩波書店、二〇〇二年、六七頁(下)]。以下、この講義録からの引用は、SVIIと略記し、本文中に示す。

(6) Jacques Lacan, *Écrits*, Paris, Seuil, 1966, p. 851. [『エクリI-III』佐々木孝次他訳、弘文堂、

一九七二、一九七七、一九八一年、三八一頁(III)]。以下、『エクリ』からの引用は、Éを略号とする。

(7)「その性的な色彩は、その本性の最も内奥の部分に刻まれているものとしてフロイトによってどれほど明確に力説されていても、裂け目の光に漂う空虚-の-色(couleur-de-vide)である。」(É, p. 851.[三八一頁](III))

ある。加えて、ラカンはサドが用いた「第二の生を奪う」という表現に着目している (SVII250: 69 下)。第一の生とは生物学的な生であり、第二の生とは象徴的な次元における生として位置づけられる。つまり第二の生を奪おうとすることは存在していたことそれ自体の痕跡を完全に抹消しようとするのである。ラカンは「カントとサド」において両者を同一視したが、ダヴィド・メナールが『普遍の構築』において指摘しているように、カント的な定言命法は対象に対する「無制約性(Unbedingtheit)」という点において完全なる抹消を求めるサディズムと等価である⁽⁸⁾。つまり両者はともに無条件的なものによる普遍の構築を目指すのである。

しかし、死の欲動はこのような無条件的な抹消に対立している。なぜならそれは歴史性を包含するがゆえに、「シニフィアンの連鎖の関数としてしか定義されない水準につながる」(SVII250: 70 下) からである。シニフィアンによって構成される言語的な領域としての「象徴的なもの(le symbolique)」に拘束されているがゆえに、死の欲動は「自然の働きに対峙するものとして位置づけられるある秩序の指標」(SVII250: 70 下) であると言える。死の欲動は自然ではなく、あくまで象徴的なものに刻印されている⁽⁹⁾。したがって、死の欲動の力によって第二の生を抹殺することは不可能である。なぜなら象徴は痕跡としてつねに残溜するからだ。

ラカンが徹底的に忌避するのは死の欲動をエネルギーの均衡の問題として捉えることである。このような定式は生の欲動と死の欲動をきれいな対称の関係として位置づけるがゆえに、安定したものへとつねに回帰する一般的なシステムへと死の欲動を還元してしまう。しかし、死の欲動はそのような循環的構造にけっして組み込まれない。なぜなら、「欲動そのもの、そして破壊欲動というものは、無生物への回帰傾向の彼岸にあるべきもの」(SVII251: 71 下) であるからだ。そしてラカンは彼岸へと向かうことを「直接的破壊の意志」(SVII251: 71 下) として定義する。彼の言う「意志」とは、「新たに再開する意志」(SVII251: 71 下) である。ただ死の欲動は、あくまでそれがシニフィアンの次元にあるがゆえに、たんなる無生物への回帰の願望などではない。それは何かを終わらせることによって別のかたちで再生

(8) Monique David-Ménard, *Les constructions de l'universel: psychanalyse, philosophie*, Paris, PUF, 1997. [モニク・ダヴィド＝メナール『普遍の構築——カント、サドそしてラカン』川崎惣一訳、せりか書房、二〇〇一年]

(9) 事実、「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲望の弁証法」においてラカンは、欲望のグラフに依拠しながら、次のように主張している。「我々の完全なグラフがシニフィアンの宝庫とし

て欲動を位置づけることを可能にするとしても、(S◇D) のような表記は、通時態(diachronie)に結びつくことでその構造を維持する」(É, p. 817. [三二八頁(III)]。つまり、欲動はシニフィアンとして象徴界にあり、通時的なものとして歴史的な水準に位置されるべきものなのだ。ただ、欲動は要求の反復のなかで「切断(coupure)」(É, p.817. [三二八頁(III)])が起きるため、それ自体で永遠に充足し続けることのできない有限な存

するための意志である。ゆえに死の欲動は破壊するだけでは留まらない可能性を含意していると言える。ラカンが、〈他の—もの(Autre-chose)〉の意志とも呼ぶこの死の欲動は、「無からの創の意志」、「再出発の意志」でもあり、否定性には縮減することのできない肯定的な力すらもち得るものである (SVII251: 71 下)。

ただ、こうした「無から」は歴史的なものが断絶された瞬間に生まれるものでもある⁽¹⁰⁾。死の欲動が生成するそのときには、決定が延期された宙吊りの瞬間を経験しなければならない。それは物理的実在としての自然には内在しない外部性を想定するということでもある。だからこそラカンは、「〈無から(ex nihilo)〉の創造」(SVII 252: 73 下)を強調する。創造には起点が必要とされるが、死の欲動の昇華、その彼岸はこの領域にある。それをフロイト—ラカンは〈もの〉(Ding)と呼ぶ。〈もの〉の領域は想像的な場でも、象徴的な場でもないものとして否定的に語られる「現実的なもの(le réel)」の領域に位置づけられる。

このような事態から理解できることは、先にも述べたように死の欲動が、「無への回帰」ではなく、〈もの〉という彼岸へと主体を駆り立てる役割をするということである。死の欲動は自己を零に帰すことによって楽になりたいというような消極的なものではなく、すべてを振り出しに戻そうとすることによって、再び始めるためにこそ存在する。死の欲動に囚われ、ひとが自ら苦しみを求めるのは、過去を清算し、別のなにかを再構築しようとする「意志」をもっているからこそである。それは死の欲動がシニフィアンと関係し、必ずしも身体が無化には結びつかないがゆえに可能になる。つまりラカンにおける死の欲動は、〈もの〉の領域の手前で滞留するのである。実際にラカンは、「カントとサド」においてフロイトに依拠しながら死の欲動を要求の次元に位置させている⁽¹¹⁾。要求とは主体が彼自身よりも偉大な何かとして想定する大他者(ラカンにおいて、それは主に「母」として表象される)に対して、具体的な要求物(それはときに事物であったり、より抽象的な愛であったりもするだろう)を言語によって求める広義の発話行為である。つまり死の欲動は、たとえそれを超え出ようとする意志があるのだとしても、あくまで象徴的なものの範疇にある要求であり、聴き話すという言語活動の内部に収まる。また例えば、『精神分析の四基本概念』においても、彼は

在でもある。そして、この切断による裂け目に生まれるものが、いわゆる「対象a」である。

(10)「歴史がフロイトの意味で記憶される何ものか、記憶すべき何ものか、シニフィアンの連鎖に書き込まれシニフィアンという実在に宙吊りにされた何ものかとして提示されたときから導入されます。」(VII, p. 251. [七一頁(下)])

(11)É, p. 776-777. [二七二—二七三頁(III)]

死の欲動における死を生物学的な身体の死に還元することを否定し、それが、「シニフィアンとしての死」⁽¹²⁾であることを強調している。

2. ラカンにおける「死の本能」

ラカンは上記のように「死の欲動」概念を整理したこの『精神分析の倫理』において、「死の本能」には別の役割を与えている。彼は死の欲動をシニフィアン連鎖の領域に位置づけ、それに抵抗しつつも、あくまで象徴的なものの枠内に留まるものとして読み解いた。一方でラカンの「死の本能」は、まさしく快原理の彼岸に存在する不可能性の領域としての現実的なものである。彼は、「現実的なものには直接無媒介的には接近できない」(VII29: 27上)とした上で、直後にこの死の本能は、「到達することが可能なあらゆる現実性の消失点、最後の構造としてしか生じえない、すべての法の彼岸における法」(VII29: 28上)であると指摘し、まさに「現実的なもの」それ自体として位置づける。ここでラカンが法と呼ぶものをヘーゲル的に説明するのであれば、「国家の法(menschliche Gesetz)」に優越するものとしての「神の法(göttliche Gesetz)」と言いかえることができるだろう⁽¹³⁾。前者はラカンにおける「象徴的なもの」に、後者は現実的なものに対応するのであるが、このセミナーにおいてラカンは、「国家の法」に対して「神の法」を守ろうとするアンティゴネーを「死の本能」の領域に置いている⁽¹⁴⁾。

実際、アンティゴネー自身、ずっと以前から「私は死んでいる。そして、私は死を望む」と言明していました。アンティゴネーが自身を石化したニオベとして描くとき、彼女は何に同一化しているのでしょうか——死の本能(instinct de mort)が現れる様相を認めることを我々がフロイトから学んだこの生命のないもの以外に。それはまさしく重要である死の本能の例証です (VII327: 174下)。

ラカンが考えるフロイトの真の教えは、死の欲動を越えた場所にある現実的なものとして

(12) Jacques Lacan, *Le Séminaire XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1963-1964*, Paris, Seuil, 1973, p. 232. 『精神分析の四基本概念』小出浩之・鈴木國文・新宮一成訳、岩波書店、二〇〇〇年、三四八頁]

(13) G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes, Werke in zwanzig Bänden*, Band 3, Suhrkamp, 1970. S. 341-2.

(14) 以前に別稿で論じているため、ラカンによる『アンティゴネー』解釈の詳細は、そちらを参照されたい。Cf. 桑原旅人「ラカンにおける倫理の問題」(『哲学の探求』、哲学若手研究者フォーラム、第四四号、十八-三六頁、2017年)

の死の本能である、と我々は考える。生命のないものへと同一化するアンティゴネーは、それを体現している。しかしながら、彼女は決して実際的な身体の死を称揚するための実例ではない。事実、ラカンは、「アンティゴネーは、限界まで、純粹欲望、それ自体としての純然たる死の欲望と呼ぶうるものの実現を導く。この欲望、彼女はそれを具現する」(VII329: 176下)と述べている。アンティゴネーは象徴的なものとしての国家の法とは異なる神の法の領域としての純粹な「現実的なもの」を守るためにこそ、死へと同一化する。ただ彼女の犠牲に捧げられた姿、この「純粹な死の欲望そのもの」の顕現は、身体の直接的な死としてのみ価値づけられるのではなく、「現実的なもの」という超越的領野への同一化の隠喩として理解されるべきである。

ラカンはこの死の本能という精神分析における特異な概念を、哲学的な言説では了解不可能なものであると強調している。実際に未公開のセミナー『精神分析の対象』において彼は、「死の本能 (instinct de mort)」を「享楽の原初的マゾヒズム (masochisme primordial de la jouissance)」と同格に並べた上で、この場が、「あらゆる哲学的パロールが不発に終わり、返答を避ける」ものだとしている⁽¹⁵⁾。この原初的マゾヒズムとは、フロイト由来の概念である。フロイトは、「マゾヒズムの経済論的問題」においてそれを原初的マゾヒズム、女性的マゾヒズム、道徳的マゾヒズムの三種類に分けていた⁽¹⁶⁾。女性的マゾヒズムとは、受動的な態度として表現されるものであり、道徳的マゾヒズムとは無意識的な罪責感のことを指す。そしてラカンがここで問題としている原初的マゾヒズムとは、女性的マゾヒズムと道徳的マゾヒズムに分化される前のより根源的なマゾヒズムである。

「死の本能」を「享楽の原初的マゾヒズム」と同一視していることから明らかであるように、ラカンにおいて死の欲動を語る際に用いられたサディズムにかわって、ここでは原初的マゾヒズムがより重要視されている。またラカンは、後述のドゥルーズによる『ザッヘル・マゾッホ紹介』にも言及している⁽¹⁷⁾未公開のセミナー『幻想の論理』において、「マゾヒストは奴隷ではない」と明言し、むしろ彼らは狡猾であって逞しいと肯定的に言及し、さらに享楽を「知っている」という点を強調する (XIV, 31 mai 1967)。ここで彼は、「身体に

(15) Jacques Lacan, *Le Séminaire livre XIII: L'objet de la psychanalyse 1965-1966*, inédit, texte établi par l'Association lacanienne internationale, séance du 8 juin 1966. (17) Jacques Lacan, *Le Séminaire livre XIV: Logique du fantasme 1966-1967*, inédit, texte établi par l'Association lacanienne internationale, séance du 19 avril 1967.

(16) Sigmund Freud, *Triebe und Triebchicksale* (1915), in *Gesammelte Werke*, Band 13, S. Fischer, 1987, S. 374. [ジークムント・フロイト「マゾヒズムの経済論的問題」(『フロイト全集18』所収)本間直樹訳、岩波書店、二八九頁]

しか享楽はない。それがまさしくフロイトにおいて存在する真理の要求に応える」(XIV, 31 mai 1967)と述べている。原初的マゾヒズムをエネルギーとする死の本能によって導かれたマゾヒストのように、その身体そのものを危険にさらすことこそが、真の享楽である。ただ重要であるのは、ラカンがこの身体の享楽を、「唯物論的であるものよりも、より大きな倫理的射程」(XIV, 31 mai 1967)をもつものと捉えていることである。少なくともドゥルーズにラカンが言及していたこの時期において、享楽は身体にのみ存在する。しかしながら、そこで想定されているのは物理的な身体にのみ還元されるようなものではないのだ。それでは一体、彼らは何を狙っているのか。このラカンにおける死の本能、すなわちこの「享楽の原初的マゾヒズム」の目標は、欲望の原因としての「対象 a 」へと主体を同一化させることである。マゾヒストたちは対象 a として欲望されることを欲望する。実際に彼は次のように述べている。

真理、それはまさしくマゾヒストの実践によって与えられます。そこで、マゾヒストが——あきらかにそれが把握できる唯一の地点で、それが対象 a であるものをいわば巻き上げること、くすねることによって——それを決然と、排除されたものとしてのこの対象への同一化に身を委ねるといことははっきりしています(XIV, 14 Juin 1967)。

「享楽の原初的マゾヒズム」、この「死の本能」が目指す目標は、そのすべてを語ることはできない残余として現実的なものに関わる「対象 a 」であることなのだ。したがって、ラカンにおける死の本能は、歴史性という実在に依拠し、換喩的なシニフィアン連鎖の段階に留まる死の欲動とは異なった位置づけを与えられていると言える。そして、『精神分析の倫理』において死の本能は生命のないものを目指すと語られていたが、ここでそれは「対象 a 」として明確化されるのである。

上記のような理路によって、我々はラカンが死の欲動と死の本能それぞれに別の意味合いを与えていた、と考える。だが、彼は死の欲動と死の本能に異なった意味付与をしているように思えるものの、その明確な定義づけを避けているために、この二つを厳密に種別化していると断言できるところまでには至らない。この二つの概念の峻別を打ち立てるために、ラカンにのみ依拠するだけでは曖昧な部分が残ってしまう。したがって、死の欲動とは区別さ

れるものとしての死の本能なる概念をより鮮明に輪郭づけするためには別の理論が必要となる。そこで本稿が依拠するのが、実際にラカンもセミネールにおいて、その著作（『ザッヘル・マゾッフ紹介』、『差異と反復』、『意味の論理学』）に言及しているジル・ドゥルーズである。

3. 「死の欲動」における反復

ドゥルーズもまた死の欲動に無生物への回帰には還元されない未来性を見出だしている。生の欲動と死の欲動は、接続性をその存在の基本とし、両者が別々に経験のなかに現れ出るということとはありえない。事実、彼は、『ザッヘル・マゾッフ紹介』において両者の依存的な結合関係を強調している。もちろん、これは生の欲動と死の欲動が同一であるということを示しているわけではない。ドゥルーズが、「エロスはタナトス以上に与件として示されるものではないにもかかわらず、少なくともそれを辺りに聞かせ、影響を及ぼす」⁽¹⁸⁾と述べている。生の欲動のほうがより生活に浸透しているように見えるが、その背後に必ず死の欲動が潜んでいる。実際にドゥルーズは、「タナトスは存在する(Thanatos est)」(PSM100: 143)と断言するが、つまりそれは彼が死の欲動を超越的なものではなく、実在するものとして捉えていることを意味する。そして彼は、この死の欲動を「反復」という観点から理解する。

エロスの彼岸に、タナトス。底の彼岸に、無底(sans-fond)。反復-紐(répétition-lien)の彼岸には反復-消しゴム(répétition-gomme)があつて、それは記憶を忘れさせ(effacer)、殺す。フロイトのテキストの複雑さはここにある。すなわち、ある種のテキストは反復なるものが、おそらく唯一の同じ力であり、悪魔的(démonique)でもあれば健全なものでもあり、タナトスとしてもエロスとしても発現すると思わせる(PSM99: 141)⁽¹⁹⁾。

ドゥルーズは、「反復-紐」の彼岸に「反復-消しゴム」があるとする。反復には何かを結びつけるものとして機能したあとに、その絆を消去するものとしても機能する側面がある。彼はここにフロイトにおける生の欲動と死の欲動の錯綜を見ているが、それは反復が邪悪な悪魔的なものと有益な救済のどちらにおいても同様の働きをするからである。したがって、反復はその内容を選ばない善悪の彼岸に位置するものと言える。また精神分析における反復

(18) Gilles Deleuze, *Présentation de Sacher-Masoch*, (19) 既訳では、「ものを消滅させ」とあるが、本稿では、「反復-消しゴム」と「(記憶を)忘れさせる」を意味する effacer の含意から上記のように訳出した。
Minuit, 1967, p. 100. [『マゾッフとサド』 蓮實重彦訳、晶文社、一九七三年、一四三頁。以下、PSMと略記する。]

は、とりわけ「反復強迫」と呼ばれるが、それは負の経験の記憶を繰り返し想起する死の欲動そのものの経験である。しかし、この種の反復は必ずしも主体を苦しめるだけではない。ドゥルーズは、『差異と反復』において以下のように述べている。

なるほど反復は、それだけですでに、束縛するものである。しかし、ひとが反復で死ぬとすれば、ひとを救い、病を癒やし、そして何よりもまず他の反復を癒してくれるのもまた、反復である。したがって、反復には落命と救済の神秘的な賭け(jeu)のすべてと、死と生の演劇的な賭けのすべてと、病と健康の肯定的な賭けのすべてが、同時に存在するのだ⁽²⁰⁾。

反復強迫は回帰する悪しき記憶によって主体を苦しめる。それはドゥルーズ的には賭けであり、落命の危険すら伴う⁽²¹⁾。しかしながら、それは同時に病を癒しうる行為でもある。つまり悪しき記憶の反復は、繰り返し想起することによって、その無意識への抑圧を回避し、それを忘却する可能性を開いているのである。死の欲動によって引き起こされる種類の反復が一筋縄ではいかないのは、繰り返される悪しき記憶の反復が、それによって強化され、さらに攻撃性を高めていくまさにその過程において、泥沼から抜け出すための可能性を開いているからだ。「反復-紐」によって強化された負の感情は、「反復-消しゴム」の効果によってこそ癒されうる。

また彼は、『ザッヘル・マッゾホ紹介』において、昇華としての「脱性化(déssexualisation)」とその逆戻りとしての「再性化(resexualisation)」という観点からも死の欲動について論じている(PSM101-102: 144-145)。「脱性化」とはリビドーが性的な対象から逸れ、そのエロスのなエネルギーが消滅することで中性化(neutraliser)してしまい、死の欲動へと近づいてしまう状況のことを指す。彼は、「脱性化」の典型的な帰結としてサディズム的な「倒錯」をあげる。サディズムの特徴は、冷淡さと冷酷さを基盤とする「無感動(apathie)」にある。中性化されたエネルギーは感情を鈍化させる。そのことによってサディズムは、人に残酷な暴力を顕現させることを可能にする。サディズム的暴力は父権的な権力行使ではなく、性的な力が中性化することによって生じる不感症こそを原因とするのだ。しかし、こうした「脱性化」は、その後「再性化」として現れるものでもある。ドゥルーズ

(20) Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, Paris, PUF, 1981, p. 13. [ジル・ドゥルーズ『差異と反復(上、下)』財津理訳、河出文庫、二〇〇七年、三三-三四頁。以下、DRと略記し、本文中に示す。]

(21) この点について、ドゥルーズ研究者である鹿野祐嗣氏の未公開の博士論文を大いに参照させて頂いた。また鹿野氏には、本稿全体に対して多くの非常に有益なご忠告を頂いた。ここに感謝の意を表す。

ズは、「倒錯的な再性化の力能は、脱性化の冷淡さが並外れたものであっただけ、よりいっそう強力であり、また広範囲にわたっている」(PSM102: 145)と述べている。死の欲動を露にする「脱性化」は、ひとの性的な力を奪うだけでなく、「再性化」することによってそれを高める機能をもつものであるのだ。ここにラカンとドゥルーズの「死の欲動」に対する解釈の共通性を見出すことができるだろう。つまり彼らは共に、苦しみが新たなエロスを産み出す可能性をもつと考えていたのである。

そしてドゥルーズはこのような「脱性化」による「再性化」という構造が、マゾヒズムにおいても当てはまると主張した上で、ニーチェに依拠しながら、「苦悩(souffrance)が、そして苦痛(douleur)さえもがある意味をもつとするなら、その苦悩なり苦痛なりは、何ものかに快をもたらすものでなければならぬはずだ」(PSM102: 146)と主張する。マゾヒズムにおいてそれらは、快感を与える。そしてそのマゾヒズムを駆動させるのは、繰り返しの機能としての「反復」である。しかし、ドゥルーズはここで快感と反復の関係を転倒させようと試みる。彼が重要視するのは、快ではなく反復のほうである。快を求めるために反復するのではなく、反復することそれ自体が快になるのである。

では、この反復による倒錯的な「脱性化」はいかなる地点に到達するのか。ドゥルーズによればその着地点は、「再性化」である。つまり死の欲動を原動力にして達成される「脱性化」は、よりエロスのな「性化」を果たすための方法としてあるのだ。彼は死の欲動の効果を、「快の対極に反復を溶接する脱性化の過程に、ついであたかも反復の快が苦痛から生じたかのようにする再性化の過程にある」(PSM104: 149)ものとして捉えている。死の欲動は、自らの性的能力をより強化するための契機として存在しうるものである。よって、ラカンと同様にドゥルーズもまた、死の欲動を無生物への回帰という側面に還元することには否定的であったと言える。

3. 「死の本能」の超越性

ドゥルーズは、その存在を示唆しつつも定式化にまでは至らなかったラカン以上により踏み込んで、死の欲動と区別される超越的な死の本能を明確な仕方で定義している。実際に、『ザッヘル・マゾッホ紹介』において彼は次のように述べている。

『快原理の彼岸』においてフロイトは、生の欲動と死の欲動、つまり「エロス」と「タナトス」とを峻別している。だがこの区別は、より深いある別のものによって、すなわち死の欲動、あるいは破壊欲動それ自体と、死の本能(*instinct*)とのあいだでしか理解されえない。というのも、死の欲動、破壊欲動は、間違いなく無意識において与えられ、示されているが、つねに生の欲動とそれらの混同においてそうされている。「エロス」との結合は、「タナトス」の「現前化(« *présentation* »)」の条件のようなものである。したがって、破壊、破壊における否定性は、必然的に建設もしくは快原理への従属的な統合の裏面として現れる。フロイトはこのような意味においてこそ、無意識にあっては両極が一体化しているがゆえに、無意識に「否(Non)」(純粹否定)は見出されない、と主張することができる。反対に、死の本能について語る時、我々は純粹状態で「タナトス」のことを指し示している (PSM27: 40)。

ドゥルーズは死の欲動と生の欲動を、混淆したものであると考えていた。上述したように、死の欲動の否定性は生の欲動の賦活へと貢献する能力をもっているのである。しかしながら、無意識それ自体にはこのような否定性と呼ばれる契機は存在していない。彼があえて死の欲動のフランス語における古い訳語である死の本能(*instinct de mort*)を別の概念として用いるのは、より純粋な死の欲動の思弁化を目指したからなのである。事実、ドゥルーズはすぐ後に次のように続けている。

ところで、それ自体としての「タナトス」は、たとえ無意識のなかにできえ心的生活に与えられえない。つまり驚くべきテキストのなかでフロイトが言ったように、それ〔存在自体としてのタナトス、すなわち死の本能〕は、本質的に沈黙している。にもかかわらず、我々はそれを語らなければならない。後述するが、それは心的生活の基礎として、また基礎以上のものとして決定的であるがゆえに、語らなければならない。我々が語らなければならないのは、すべてがそれに依存しているからなのだが、フロイトが明言するように、思弁的な、神話的なある方法でしか我々はそれを実行することができない。それを指し示すことによって、このような超越性(*transcendence*)を連想させること、あるいはこのような「超越論的(« *transcendental* »)」原理を指し示すことが唯一可

能である本能という名称を、我々はフランス語に残しておかなければならない (PSM28: 40-41)。

加えて、「死の本能とは何か?」と題せられた節においても括弧で強調しつつ、「フランス語では、この超越的(transcendente)で無言の審級を指し示すために、「本能(« instinct »)」、死の本能(instinct de mort)という語を残しておくべきだろう (傍点引用者)」(PSM100: 143)と述べ、単なる破壊欲動として経験的な領野に実在する「死の欲動(pulsions de mort)」とは異なる純粹な死の欲動として「死の本能」を問いに付しているのだ⁽²²⁾。それはタナトスとエロスという二元論を越えた一元論的な「純粹状態でのタナトス(Thanatos à l'état pur)」⁽²³⁾の超越的な場である。そしてその後の『差異と反復』においては、「死の欲動」という用語は完全に廃棄され(実際に一度も死の欲動、ないし破壊欲動という語は、『差異と反復』に登場しない)、「死の本能」という用語のみが選択的に用いられている⁽²⁴⁾。また彼が、「死の本能は、ひとつの超越論的な役割を演じる。だからこそ、死の本能は何よりも沈黙している」(DR27: 59 上)と述べていることから理解できるように、『ザッヘル・マゾッホ紹介』から議論は継続している。つまりここでも彼は、「本能(instinct)」という語を意図的に使うことによって、フロイトの「死の欲動」という概念のもつ経験的含意を排除し、その超越論性を強調しているのだ。

この用語選択は生の欲動と死の欲動という二項対立を超えた特権的な位置を死の本能に与えていることから生じる帰結であるとも言える。つまり死の本能は経験的であり、かつ象徴的なものを含み込むこの二つの欲動とは別の超越的な審級に属しているのである⁽²⁵⁾。ドゥルーズは、「蝶番からはずれた空虚な時間こそが、まさに死の本能である」(DR147: 300 上)と述べている。つまりドゥルーズにおける死の本能は、過去・現在・未来と三つに分割された一般的な意味での時間概念と異なる場を形成しているのだ。

また死の欲動と生の欲動という二元論を超えた領域に死の本能は存在するのであるが、ドゥルーズはそれをナルシシズム的自我との関係において論じている。実際に彼は、「エロス

(22)同様の指摘が、上述の鹿野氏の博士論文に存在する。

(23)ここでドゥルーズは同時に、単なるエロスと純粹状態でのエロスも区分している (PSM101: 144)。

(24)またドゥルーズ研究者の小倉拓也も、死の欲動とは区別されるものとしての死の本能の思弁性を指摘している。Cf. 小倉拓也「ドゥルーズにおける「倒錯」問題——1960年代におけるその展開と帰結」(『年報人間科学』(三三号)、七五-

八八頁、二〇一二年)

(25)先行研究としてドゥルーズ哲学における死の本能の問題をモーリス・ブランショと関係づけながら分析した次のようなものがある。Cf. 國分功一郎「抽象性と超越論性——ドゥルーズ哲学の中のブランショ」(『思想』(九九九号)、二一—四七頁、岩波書店、二〇〇七年)

とムネモシュネとの相関関係は、記憶なきナルシスの自我、深刻な健忘症、そして愛なき脱性化された死の本能に入れ換わる」(DR147: 300上)と述べている。ナルシスの自我は他者への愛という形で外部へと向けられるべきエネルギーが自己へと備給された結果として生じ、「理想自我(moi idéal)」と言い換えることができる。彼はこのような実際の自我の現実性からは切り離された理想自我の形成原因を「死の本能」に帰している⁽²⁶⁾。そして存在者に対して外立する死の本能は、あらゆる実在性から主体を引き剥がそうとする。またラカンが死の本能を「純粹欲望(désir pur)」(SVII 328-329: 176下)とすることによってその経験的含意を無効化したのと同様に、ドゥルーズもそれが物質的なモデルとは何ら関係がないという点を強調する。

死は、生けるものが「還ろうとする」生命のない冷たい物質の客観的なモデルのなかに現れないのだ。死は、〔無意識における〕ある原型をそなえた主観的で差異化=分化した経験として、生きるもののなかに現前しているのである。死は、物質のひとつの状態に対応しているのではない。死は、反対に、あらゆる物質を放棄してしまった純然たる形式——時間という空虚な形式——に対応しているのだ(そして、時間を満たす仕方は、反復を、死んだ物質の外的な同一性に、さもなければ不死の魂の内的な同一性に従属させる仕方とまったく同じなのである)。つまり死は否定に還元されず、対立という否定的なものにも、制限という否定的なものにも、還元されることはないということである。死に原型を与えるのは、死すべき生命を物質によって制限するということでもなければ、不死の生命を物質に対立させることでもない(DR148: 302-303上)。

ドゥルーズにとって死は、非人称的な力の言い換えであり、世界がけっして言語活動に代表されるような表象=再現前化のシステムに覆われてしまわないことの証である。そして彼はこのような無意識的な領野に、「反復-紐、反復-染み、反復-消しゴム(répétition-lien, la répétition-tache, la répétition-gomme)」(DR151: 308上)という三つの総合があると主張する。

第一の総合、「反復-紐」とは、生ける現在という時間のなかで快に心的な生が括りつけられる反復である。第二の総合、「反復-染み」とは、現在とは切り離された「純粹過去

(26)「ナルシズム的自我が理想自我のなかに反映し、おのれの行く末を超自我のなかに予見して、あたかもひび割れた《私》の二つのかけらのようになるのは、まさしく死の本能を貫通〔横断〕してのことである」(DR, p. 150. [三〇七頁(上)])

(passé pur)」によって、記憶、忘却、エロスといった心性が快原理に従って実際に作用する条件となるものの反復である。「第二の総合は、純粹過去による時間の根拠を表現している」(DR151: 309 上) とされるが、それは「自我」が快原理のなかで生きることが可能にするようなものとしてその成立根拠を与えている。しかし、最も重要であり、死の本能の水準にあると言えるのは、第三の総合、すなわち「無底(sans-fond)」(DR151: 309 上) である。フロイト的な死の欲動と生の欲動の二元論の彼岸にあるものこそが死の本能であり、それはあらゆる基礎づけを欠いた無底なのだ。そしてこの死の本能としての「反復-消しゴム」は、想起された不純な記憶を消していく治癒ないし破滅の反復であると言い換えることができる。それはひとつの賭けとして我々を救いもすれば、破滅へと追い込むこともある「未来だけにかかわる」(DR151: 309-310 上) 反復であり、過去や現在の諸条件を抹消することでそれらを破壊させうる力をもつ。

ただダヴィッド・ラブジャードが指摘しているように、この領域を不定形や未分化というかたちでのみ捉えてしまうのには問題がある⁽²⁷⁾。というのも、この無底は隠喩や換喩が蠢いているタナトスとエロスが縋い交ぜになった表象の世界とは異なる形而上学的な領域であり、あらゆる言語活動を含む現象化された物質的な次元の上位にある別の法であるからだ。また、『ザッヘル・マゾッホ紹介』において峻別され、『差異と反復』においてより重要なものとして選択されたこの「死の本能」という思弁は、『意味の論理学』においても継続して用いられている。

[...] しかし、脱性を表象する強いられた運動とはタナトスや「強迫(« compulsion »)」であり、それは、原初の深層と形而上学的表面、深層の残忍な破壊欲動と思弁的な死の本能という両極のあいだで作用している。我々が知るように、この強いられた運動の最大の危険は、両極の混同、あるいはむしろ、表面の全般的な瓦解と引き換えに、底なしの深層へとすべてが失われることである。しかし、逆に強いられた運動の最大のチャンスは、物理的表面の彼岸で広大な形而上学的表面が組成されることであり、そこには深層の貪り喰う対象-貪り喰われる諸対象さえも投影される。したがって、そのとき死の本能を強いられた運動の総体と呼ぶことができるし、形而上学的表面を強いられた運動の全振幅と呼ぶこともできる (LS335: 114-115 下)。

(27) David Lapoujade, *Deleuze, les mouvements aberrants*, Paris, Minuit, 2014, p. 53. [『ドゥルーズ 常軌を逸脱する運動』掘千晶訳、河出書房新社、二〇一五年、六三頁]

タナトスというこの死の欲動は、脱性化の促進を担う。ただそれはエロスとしての生の欲動の力によって再性化へと寄与してしまうという危険性を内包している。しかしながら、死の欲動が死の本能にまで高められれば、それは脱性化の力のみによって物理的な次元を超出し、際限のない超越的な領域を活性化させることができるのである。つまり死の本能とは、決して再性化には貢献しえない純粋な死の欲動なのである。

おわりに

ラカンは、『精神分析の倫理』において死の欲動を歴史性の次元に置くことによって、それを象徴的なものと解釈した。他方で、「現実的なもの」という「象徴的なもの」の彼岸を設定することによって、「純然たる死の欲望」というかたちで、「死の本能」という次元の存在を仄めかした。そして六〇年代半ばから後半にかけて、彼は死の本能を「享楽の原初的マゾヒズム」と結びつけ、それが「対象 a 」への同一化を目指すことで「現実的なもの」に関わることを明示した。しかしながら、ラカンはこの二つを明確に区別していると断言できるような発言まではしていない。

一方でドゥルーズは、『ザッヘル・マゾッホ紹介』において死の欲動と死の本能を峻別した上で、『差異と反復』と『意味の論理学』のなかでその概念をより深めた。彼はラカンがその差異の重要性を仄めかしながらも（ただラカンが、これらのドゥルーズの著作を読んでいたことは確かであるのだが）、決して確言することまではしなかった死の本能という超越論的な概念を定立しえた。ドゥルーズは、フロイト＝ラカンの精神分析から刺激を受けつつも、この死の本能という思弁を形而上学的な表面において賦活させたのである。